世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

自称代名詞「わし」・「わしら」・「わしや」の研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-09-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉﨑, 夏夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1899

自称代名詞「わし」・「わしら」・「わしや」の研究

杉﨑　夏夫

（一）はじめに

『東海道四谷怪談』は四世鶴屋南北によって書かれた歌舞伎脚本で、文政八年七月に江戸中村座で初演されたものである。四世鶴屋南北は、宝暦五年に型付職人の次男に生まれ、『東海道四谷怪談』を書いた当時は七十一歳であった。四年後の文政十二年に没するので晩年の作品である。

『東海道四谷怪談』はお岩についての巷説や実際に起こった戸板流し事件など、様々な場で社会の関心が向けられている時事を織りまぜた内容となっている。このように常に社会へ関心を持ち庶民の暮らしをよく観察していたことや、彼自身が江戸で生まれ育ったという点からも江戸の言葉に通じていたことは当然であることから、『東海道四谷怪談』を研究資料として調査をすすめ、当時の人称代名詞について考察を加えることとする。

（二）研究方法について

表現主体がその表現をするにあたり、自分自身・表現の相手・話題の人物などそれぞれとの種々様々な関係を正確に把握し、それを表現形式に反映させる。このような言語表現に表れる待遇意識を探り明らかにすることによって、当時の各語の表現価値を知り、また、それらに対応する各語との関係についても論及したいと考える。

歌舞伎の台本における言語の待遇表現を考えると、特に待遇意識が明確に表れるのは自称・対称代名詞である。したがって先ずは、自称・対称代名詞の待遇価値を明確にすることによって当時の人称代名詞の使い方が分かると考える。そこで、その待遇価値の調査方法として、すべての人称代名詞を収集し、各人称代名詞ごとに、次の事項についての調査をするという方法で行う。

①自称との比較において把握された対称。

○対称代名詞
○対称の動作・存在に関する動詞・助動詞
②対称との比較において把握された自称。
○自称代名詞
○自称の動作・存在に関する動詞・助動詞

まず、『東海道四谷怪談』に表れる自称・対称代名詞の各語について使用数を調査した。これらの語の中には、用例が非常に少なくその特徴を判断することの困難なものや、江戸語の代名詞としては特殊と思われるものもある。したがって主に比較的用例数の多い対称代名詞を研究対象に扱い、これまでに「おまへ」・「あなた」・「こなた」・「そなた」・「おのれ」・「てまへ」・「われ」・「おめへ」について論じてきた。(注1・2)

本稿では、次の自称代名詞に注目し、「わし」・「わしら」・「わしや」についての考察を加えることとし、先述の研究方法に従って各語ごとにその使用状況を調べていくこととする。

なお、テキストには『新潮日本古典集成　東海道四谷怪談』(昭和五十六年　新潮社)を用いた。

(三)「わし」

『東海道四谷怪談』では、自称代名詞「わし」の使用例は八十五例である。

「わし」の待遇意識を把握するため、まずこの自称代名詞を使用している場面における話し手と対称となる聞き手がどのような人物であるかを調査した。これらの間に存在する上下親疎などの人間関係や身分関係等がどのようになっているかを図表に整理したものが図表Aである。

この図表は、全ての「わし」の使用例における身分関係を図示したものであるが、これらの表現は厳密にはすべて等質の待遇表現であるとは限らない。しかし、「わし」の諸例の人間関係を身分的な面から見ることによって、その自称代名詞の基礎となる待遇意識を知ることができると考える。

よって、すべての用例の身分的な関係を記号で示した特徴をみると、男性は対等かやや目上、もしくは目上に使用され、女性は目下かやや目下に対し使用される語であると考えられる。

先ず幾つかの使用例を挙げて、自称代名詞とそれに対応する語(対応語)との関係について考える。

①　直助→藤八

モシ、なにわしがそんな事をするものか。売溜めも薬も、あした親方のところへ持つて行きやす……明日わしが持つて行きますよ　(86―11　88―2)

[86頁11行の略]

②　秋山長兵衛→民谷伊右衛門

さやう〳〵。まづ心当ては下町へんと存じつき、わしが身寄りが築地にあるゆゑ、あの辺まで参り、新堀通りへかゝる道にて見あたりました。なんでもあいつは深川辺へ参る

と見えました　（129―8）　唐薬のソウキセイ、あのお薬を私に　（189―14）

③　小仏小平→民谷伊右衛門

ア、めつさうな。たつた今まで両手も口もゆはへられ、どうしてさやうナ……さう言はつしやりまするなら、お岩様を殺したは、わしが咎になつて人殺しになりませう。その代わりには、モシ旦那様、どうぞ盗んで走りましたあの

④　仏孫兵衛→お槇

コレ、聞いて下され、わしが悴がある武家方へ奉公に行きましたが、先からかけ落ち、今に行方が知れませぬが、今日聞けば、女と男を杉戸へ打ちつけ、そのまゝに流れあるくときつい評判。それゆゑ心も心ならず、内へ帰つてこ

図表Ａ「わし」

代名詞	頁	行	性	話し手	聞き手	性	待遇	備考
わし	23	13	男	彦兵衛	藤八	男	—↓	
わし	25	8	男	彦兵衛	石、桃助、文嘉	男	—	
わし	29	11	男	直助	お袖	女	—	
わし	29	13	男	直助	お袖	女	—	
わし	64	6	男	直助	お袖	女	—	
わし	64	8	男	直助	お袖	女	—	
わし	64	9	男	直助	お袖	女	—	
わし	64	14	男	直助	お袖	女	—	
わし	65	5	男	直助	お袖	女	—	
わし	86	11	男	直助	藤八	男	—↑	
わし	88	2	男	直助	藤八	男	—↑	
わし	110	8	男	直助	民谷伊右衛門	男	↑	
わし	110	9	男	直助	民谷伊右衛門	男	↑	
わし	110	9	男	直助	民谷伊右衛門	男	↑	
わし	114	1	男	直助	お袖	女	—↑	
わし	114	3	男	直助	お袖	女	—↑	
わし	114	13	男	直助	お袖	女	—↑	
わし	124	11	男	宅悦	民谷伊右衛門	男	↑	
わし	125	4	男	宅悦	仏孫兵衛	男	-1	
わし	129	8	男	秋山長兵衛	民谷伊右衛門	男	↑	
わし	189	14	男	小仏小平	民谷伊右衛門	男	↑	
わし	208	7	男	仏孫兵衛	お槇	女	—↑	
わし	214	14	男	直助	民谷伊右衛門	男	↑	
わし	215	4	男	直助	民谷伊右衛門	男	↑	
わし	215	5	男	直助	民谷伊右衛門	男	↑	
わし	215	5	男	直助	民谷伊右衛門	男	↑	
わし	215	8	男	直助	民谷伊右衛門	男	↑	
わし	222	2	男	秋山長兵衛	民谷伊右衛門	男	↑	
わし	213	3	男	庄七	お袖	女	—↓	
わし	213	14	男	庄七	お袖	女	—↓	
わし	237	3	男	次郎吉	長蔵	男	↑	
わし	240	6	男	仏孫兵衛	お袖	女	—↑	
わし	241	9	男	仏孫兵衛	お袖	女	—↑	
わし	259	6	男	宅悦	直助	男	—↑	
わし	262	6	男	宅悦	お袖	女	—	
わし	262	10	男	宅悦	お袖	女	—	
わし	263	12	男	宅悦	お袖	女	—	
わし	264	7	男	宅悦	お袖	女	—	
わし	264	8	男	宅悦	お袖	女	—	
わし	264	11	男	宅悦	お袖	女	—	
わし	280	12	男	直助	佐藤与茂七	男	—	
わし	281	3	男	直助	佐藤与茂七	男	—	
わし	281	11	男	直助	佐藤与茂七	男	—	
わし	295	7	男	次郎吉	仏孫兵衛	男	↑	
わし	296	12	男	仏孫兵衛	お花	女	↓	
わし	320	3	男	長蔵	お熊	女	—	
わし	323	2	男	長蔵	仏孫兵衛	男	—↑	
わし	323	13	男	次郎吉	お熊	女	↑	
わし	324	2	男	次郎吉	お熊	女	↑	
わし	329	3	男	長蔵	赤垣伝蔵	男	↑	
わし	339	4	男	小仏小平	又之茸丞、孫兵衛など	男、女	↑	
わし	381	12	男	民谷伊右衛門	お熊	女	↑	
わし	30	8	女	お袖	直助	男	—↓	
わし	73	14	女	お袖	佐藤与茂七	男	—↑	
わし	105	12	女	お岩	お袖	女	—↓	
わし	105	14	女	お岩	お袖	女	—↓	
わし	106	5	女	お岩	お袖	女	—↓	
わし	106	13	女	お岩	お袖	女	—↓	
わし	107	8	女	お岩	お袖	女	—↓	
わし	138	11	女	お槇	中間	女	—↓	
わし	165	13	女	お岩	宅悦	男	↓	
わし	166	3	女	お岩	宅悦	男	↓	
わし	179	4	女	お岩	宅悦	男	↓	
わし	212	9	女	お熊	民谷伊右衛門	男	↓	
わし	213	8	女	お熊	民谷伊右衛門	男	↓	
わし	214	1	女	お熊	民谷伊右衛門	男	↓	
わし	290	14	女	お熊	仏孫兵衛	男	—↑	
わし	292	9	女	お熊	お花	女	↓	
わし	296	4	女	お熊	孫兵衛、お花	男、女	—↑	
わし	317	3	女	お熊	長蔵	男	—	
わし	329	12	女	お熊	庄七、長蔵	男	—	
わし	344	13	女	お袖	直助	男	—↑	
わし	378	1	女	お熊	民谷伊右衛門	男	↓	
わし　（特）	67	8	男	佐藤与茂七（町人）	宅悦	男	—↓	口真似
わし　（特）	275	12	男	佐藤与茂七（町人）	直助	男	—	口真似
わし　（特）	279	9	男	佐藤与茂七（町人）	直助	男	—	口真似
わし　（特）	279	12	男	佐藤与茂七（町人）	直助	男	—	口真似
わし　（特）	316	6	男	民谷伊右衛門	お岩	女	↓	夢
わし　（特）	149	5	女	お岩				独白
わし　（特）	179	13	女	お岩				独白
わし　（特）	179	14	女	お岩				独白
わし　（特）	179	14	女	お岩				独白
わし　（特）	180	11	女	お岩				独白
わし　（特）	183	3	女	お岩				独白
わし　（特）	342	3	女	お袖				独白

のやうな噂すると嫁も孫めも案じをらうと、あいつらには隠して、コレ霊岸様で御回向願うてこの塔婆。息災でゐれば仕合せ。もし死にをつたらと戒名もつけて貰うてきました　（208―7）

⑤

宅悦→お袖

これサく、どうしてわしがそれを知るものか。こりやマア、ひよんな咄をしだして……イエサ、わたしやアそんな詳しくは……これはまた迷惑な。ありやうはわしも人の咄で聞いたが、なんにしてもお力落としでござりやす。

わしはお暇申します　（263―12　264―7・8）

⑥

お袖→佐藤与茂七

与茂七さん、様子を御存じないからは、恨ましやんすも腹立ても尤もでござんすが、男欲しさのいたづらとは、あんまりむごいおつしやりやう。お屋敷の騒動より、皆ちりぐに御浪人。今もお咄し申したとほり、親の為にかうした勤め。いたづらな心があらば、なにしに親の疵瑕までも、打ち明けて咄しませう。これまで一度の便りもなう、つれないおまへに操を立て、せつない苦しい言い訳を、聞きわける人はまれにして、たいがいみんな無得心。それをとやかう言ひぬけて、人一倍のこの苦労。わたしがかうした勤めより、恨みはこちからなんぼもある。現在わたしといふ女房のある身でゐながら、かういふところへ遊びに来て、女房と知らずこのわしに、貞女やぶらせ、ようも〳〵抱いて寝ようとさしやんしたナ。かういふところに遊んでゐる間はありながら、女房のところへ一言の、便りする間はござんせぬか。ほんに〳〵、あんまりなおまへの心に引きくらべ、逆ねぢな今の腹立て。そりやあんまりぢや〳〵わいなア　（73―14）

⑦

お岩→宅悦

わしも最前はにはかの熱気、あの苦痛、少しは直つたやうぢやわいの……さうして下され。この様子では、なか〳〵わしは歩行は叶はぬ。コレ、こゝにたしかおあしが。

これ持つて、早う頼みます　（165―13　166―3）

⑧

直助→お袖

コウ、お袖さん、坊主が憎けりや袈裟までと、おまへの言ふのも尤もだが、今のやふに言つた日にやア、すぐに敵にけどられるわな。しかし、かう言ふこのわしが、以前はおまへの親御、四谷左門様とは同じ家中の、奥田将監が下部の直助。御短慮とはいひながら御家中は皆ちり〴〵。わづか小者のわしまでも、藤八五文の薬売り。おれはまだしも、左門様のお娘御が、今では楊枝見世の雇い女。これも時世とあきらめて、貧しい暮もとも〴〵に……おまへがうんとさへ言へば、おれもまた、三度飛脚へ狐の憑いたやうな形をして歩きもしねへハ。なんぞおつりきな商売を見つ

けて、おめへと二人、こんなところへも出しちやアおかねへハ。どうだなく　（29—11・13）

⑨

直助→民谷伊右衛門

はて忘れなされたか。わしが女房の姉といふのは四谷の娘のあのお岩。わしが女房は妹のお袖。そんならまんざらおまへとわしは敵同士。逢うた幸ひ女房が姉の敵の民谷、サア、立ち上かつて勝負さつしやい伊右衛門殿。

ト言ふところだが言はねへの。そのかはりにはわしがまた、出世の咄があるときは、今のおまへの貰つた書物、借りに行きやす。その時必ず知らねへ顔をなさいますなよ。（215—5・6・8）

⑩

お槇→中間

コレ、こなたは先に帰つて言はうには、わしはたゞ今帰りまするとお上へ申して下され　（138—11）

⑪

お袖→直助

かけもかまはぬ小者のそなた。それほどまでに、この身を思うて……以前そなたは下部直助、わたしがとゝさん左門様とは、将監様は同じ格式。その小者の軽い身でゐながら、浪人したとあなどつて、わしをとらへてあたいやらしい。聞く耳は持たぬわいなう　（30—8）

⑫

お岩→お袖

アゝこれ。

なるほど、朝夕貧しい暮らしをするゆゑ、そのやうに思いやるも尤も。また、わしがこのやうな物かゝへてゐるゆゑ、なほさらさう見ゆる筈ぢやが、さつきに内を出る時に、すこしばらついたゆゑ、傘はなし、それでこれを。

マア〳〵、わしよりはそなたの身の上。お屋敷にゐる時分、与茂七といふ許嫁がありながら、この頃聞けば、おそろしい、地獄とやらに……なんぼ貧しい暮らしをしても、武士の娘のあらう事か。

トサ、表向きでは言はねばならぬ。そこを言われぬわしが身も、ありやうはそなたの推量のとほり、いやしいわざを勤めるも、年寄つたとゝさんが、貧苦の上にわしらへ気がね。現在娘の兄弟に、隠して。（105—12・14　106—5・7）

⑬

お熊→民谷伊右衛門

わしもそなたの噂を案じ、こゝで逢うてこのやうな嬉しい事はないわいの。知りやるとほり連合ひ源四郎殿に別れてより、師直様へ御末の奉公。その時のあの顔世様の恋の取り持ち。しぶとい奥方強情ゆゑに塩冶の騒動。その節師直様のおつしやつたは、もしやのちのち難儀な事のある時は、願うて来いとこれ〳〵。

これはあの御前様の御判のすわつた御墨付も同前。聞けば我が身は浪人したと聞いたゆゑ、願うて出てそちが難儀

を救はうとは思うても、今の亭主は塩冶の屋敷の又者ゆゑ、どうかかうかと思ふうち、伊右衛門という浪人が、女房切ったその上に、隣り屋敷の者どもまでも殺してのいたといふ噂。それゆゑにこのやうに

戒名では目立つまいと、塔婆へ書いたは俗名民谷伊右衛門と、そなたは死んだと噂させるわしが献立。何と知恵であらうがの　（212―9　213―8）

これまでに人称代名詞がどのような待遇意識により用いられているかを知るために、各人称代名詞を使用している人物と聞き手である対称の人物との間に存在する身分的な関係を把握しておく必要があると考え、どのような人物間において使用されている代名詞であるかを調査してきた。(注1・2)

今回扱う自称代名詞の「わし」が使用された八十五例に表れた表現は、その場面に存在する様々な言語条件に基づき待遇された結果の表現であり、単に身分的な関係だけに基づく表現ではないが、その人称代名詞を使用する上での最も基礎となる待遇意識であることには間違いないと考える。そこで、先ずこの身分的な関係に基づく基本的な待遇意識を明らかにした上で、更に会話上に存在する様々な言語条件の影響を考えていくことにする。

この図表Aでは、その身分関係を記号（↑：目上　―：対等　↓：目下）で示した。

ただし、例⑧「直助↓お袖」例⑪「お袖↓直助」のような関係については同じ人物同士でも待遇に変化が生じる場合がある。この二人の人物は、幕によってそれぞれの立場に変化が生じるのである。直助は以前、塩冶家中の武士奥田将監の中間であったが、品行の悪さにより主人から勘当されたという経緯がある。一方、主人であった奥田将監とお袖の義理の親である四谷左門とは同じ家中の家来であったため、同僚という関係であった。お袖から見れば、父親である左門の同僚の家来にあたる直助は目下の存在である。また、お袖には佐藤与茂七という配偶者がいたので、直助がしつこく言い寄ってくることは迷惑であった。しかし、塩冶家の解体により、お袖は与茂七と離れ茶店や地獄宿で働かざるをえない状況となる。そのような中、与茂七と思われる人物が殺された。途方に暮れるお袖に言葉巧みに近づいた直助は、仮の夫婦として暮らすことを提案し、お袖もそれに承諾する。ここまでが初日序幕の内容で、後日序幕では仮の夫婦（世間的には夫婦）として登場することとなる。そこで、お互いの待遇が逆転することになるのである。したがって、このような身分関係以外の言語条件も加味して待遇関係を整理した。

また、待遇意識は、使用される代名詞とその対応語との関係にも表れる。特に対称に対する待遇意識は、対称代名詞に顕著に表れるが、自称代名詞にも、話し手と聞き手の場において使用されるものであるため待遇意識は表現に反映される。したがって、これまでと同様の調査を行うことで自称代名詞の待遇意識も明確になると考える。

先ず自称代名詞の「わし」と対応関係にある自称の動作・存在に関する表現を調べることにより、「わし」の待遇意識の程度を探る。そこで先述の用例に表れた対応する語（対応語）を図に整理すると、次の対応表B図になる。

対応表B 「わし」

		自称		対称		
	話手→聞手	代名詞	動詞	代名詞	動詞	命令表現
男	直助→お袖	わし おれ	歩きもしねへ 出しちゃおかねへ	おまへ おめへ	言う 言った 言へば	
	直助→藤八	わし	するものか 持って行きやす 持っていきますよ			
	直助→民谷伊右衛門	わし	言ふ 言はねへ 借りに行きやす	おまへ	貰った	勝負さっしゃい ～なさいますな
	秋山長兵衛→民谷伊右衛門	わし	存じつき ある 参り 見あたりました 見えました			
	小仏小平→民谷伊右衛門	わし わたくし	ゆはへられ ～なって ～なりませう 盗んで走りました		言はっしゃりまするなら	
	仏孫兵衛→お槇	わし	聞けば ～ならず 案じをらう 隠して 願う			聞いて下され
	宅悦→直助、お袖	わし	した	おまへがた	ござりましたネ なってゐる ありやせうネ ござるかネ	
	宅悦→お袖	わし わたしやア	知るものか しだして 聞いた 申します		お力落としでござりやす	
女	お袖→直助	わたし わし	持たぬわいなう	そなた	思うて ゐながら あなどって とらへて	
	お袖→佐藤与茂七	わたくし わし	お咄し申した ～あらば 打ち明けて咄しませう 操を立て 言ひぬけて ある	おまへ	御存じない 恨ましやんす 腹立てて 遊びに来て 知らず 抱いて寝ようとさしやんしたナ おっしゃりよう 遊んでゐる間はありながら 便りする間はござんせぬか	
	お岩→お袖	わし わしら	かゝへてゐる 聞けば 言はねばならぬ 言われぬ 勤める	そなた	する 思いやる ありながら しても	
	お岩→宅悦	わし	直ったやうぢゃわいの 叶わぬ 頼みます		～下され 持って	
	お槇→中間	わし		こなた	帰って言はう 申して下され	
	お熊→民谷伊右衛門	わし	案じ 逢うて 別れて 聞いた 願うて出て 救はう 思う 書いた	なた そら そ	知りやる ～した 死んだ	

男性の使用した「わし」について考察を加えると、この対応表B図に表われている自称代名詞「わし」の対応語は「言ふ」「ある」「聞いた」「願う」等の平常動詞である。また、否定の表現では「歩きもしねへ」「出しちゃおかねへ」等の平常動詞に助動詞「ない」の音転した「～ねへ」の付いた形が対応している。また、丁寧の助動詞「～ます」の付いた「持っていきますよ」「見えました」「盗んで走りました」や「ます」の音転した「～やす」の付いた「持って行きやす」「借りにいきやす」。また謙譲語の「存じ」「参り」「申します」等の敬語表現との対応も見られる。

次に女性の使用の場合の対応語では、「頼みます」という丁寧の助動詞「～ます」が付いた表現も一例だけ見られるが、ほとんどは「ある」「勤める」「思う」「書いた」

等の平常動詞が対応する。

このように「わし」の使用例は、男性の場合、対等かやや目上、もしくは目上に使用され、平常動詞や敬意の軽い敬語表現と対応する表現であると考えられるが、女性の場合は目下かやや目下に対し使用され、平常動詞と対応する表現であると考えられる。

しかし、待遇段階を断定するに当たり、先にも述べたが待遇表現の基礎をなす待遇意識は対称との関係において明確に把握されるものであるため、待遇意識は対称に関する表現には表れやすいが、自称に関する表現では対称のように明確には表れにくい傾向がある。したがって、自称代名詞を対称代名詞の場合と同様の基準で判断しても、対称代名詞の待遇段階にその位置を求めることはできない。そこで、各自称代名詞がどのような対称代名詞と対応しているかを調査し比較することで、対称代名詞の各待遇段階内に各自称代名詞の位置づけを行いたいと考える。

そこで先の対応表B図の対称の項目に、いくつかの「わし」に対応する対称代名詞が見られるが、このような対応する対称代名詞を調査し対応関係を明らかにすることで、対称代名詞の待遇段階に各自称代名詞を位置づけたいと考える。先に挙げた使用例だけでは不十分であるため、この①～⑬の使用例と、同一の話し手と対称の関係で行われた会話中に表れるすべての対称代名詞を調査し、次のような結果を得た。

① 直助→藤八
おめへ

② 秋山長兵衛→民谷伊右衛門
きさま・こなた

③ 小仏小平→民谷伊右衛門
おまへ・おまへさま・こなた

④ 仏孫兵衛→お槇（お弓も含め）
こなたしゅう

⑤ 宅悦→お袖
おまへ

⑥ お袖→佐藤与茂七
あなた・おまへ・こちのひと

⑦ お岩→宅悦
こなた・そなた・わがみ

⑧ 直助→お袖
おぬし・おまへ・おめへ・そなた
てまへ・てめへ・わりやア

⑨ 直助→民谷伊右衛門
おまへ・おめへ

⑩ お槇→中間
こなた

⑪ お袖→直助
おまへ・こちのひと・こなさん
そなた

⑫ お岩→お袖

そなた

⑬　お熊→民谷伊右衛門

そち・そなた・わがみ

調査した結果を次の図表Cに整理する。

このように男性については「おまへ」「こなた」が対応関係にあると考えられる。

男性の使用の場合は、「おまへ」は対等から目上に対し使用され、敬語表現を基本的な対応とする語であり、「こなた」は程度の差はあるものの敬語表現を伴った対応が基本で、やや目下から目上までに使用される表現である。また、「こなた」はやや目下か目下に対し、平常動詞が対応する表現であることが、これまでの研究より明らかとなっている。

女性の使用については「そなた」の使用が最も多く、「わし」は「そなた」と同じの待遇段階に属す自称代名詞であると考えられる。また、「おまへ」や「こなた」といった表現も少なからず使用されているため、これらの待遇段階でも「わし」は使用される語であると考えられる。

図表Ｃ　「わし」に対応する対称代名詞

	対称代名詞	男	女
1	あなた		1
2	おぬし	1	
3	おまへ	4	2
4	おまへがた	1	
5	おまへさま	1	
6	おめへ	3	
7	きさま	1	
8	こちのひと		2
9	こなさん		1
10	こなた	2	2
11	こなしゅう	1	
12	そち		1
13	そなた	1	4
14	てまへ	1	
15	てめへ	1	
16	わがみ		2
17	わりやア	1	

更にこれらをもう少し詳しくみると、例⑧の「直助」の使用では様々な対称代名詞が使用さている。これは先述のように幕によって「直助」と「お袖」の立場や待遇に変化が生じるためである。したがって使用される対称代名詞も自称代名詞も変化をするため、これらの全てが「わし」に対応する対称代名詞だとは断定できない。

例②の場合は、直助が「やア、おめへは」（86―5）と用いた例であるが、これは思いも掛けない状況でとっさに口を衝いて出た表現であるため、「わし」と対応関係にある対称代名詞とは考えにくい。

以上のように、自称代名詞「わし」は、男性語としては「おまへ」「こなた」といった語群の待遇段階に属し、女性語としては「そなた」や「おまへ」「こなた」といった語群の待遇段階に属すと考えられる。

（四）「わしら」

自称代名詞「わしら」の使用例は七例で、その内一例が特別用法である。用例が少なく資料的に不足ではあるが、全ての使用例を挙げ考察をする。

⑭

仏孫兵衛→お袖

なに、それが恥づかしうござらう。コレ艱難な暮しといへば、この子の母親めを聞いて下され。それはくかひぐしい生れ、まだ生若い身の上で、正月の薺からはじめて、嫁菜・たんぽぽ・ほうれん草、または枝豆・ゆで玉子、あるとあらゆる出商、その艱難の中で舅のわしらをば、よう孝行にしてくれまするて　（241―6）

⑮

甚太→浄念

イヤモウ、わしらは同家中に勤めてゐるうちから念頃な人ゆゑ、いちばい気の毒に思うのさ　（372―7）

⑯

お熊→庄七

コレ質屋の若イ衆、ぐぢ〳〵言ってゐられては、わしらも痛くない腹を探られるやうな心持だ。なにもかもあらひざらひぶちまけて言つてしまはしやい　（320―6）

⑰

お熊→小塩田又之丞

モシ〳〵、そのやうにおどしかけては、町人というものはびくくして、言う事も言ひませぬわナ。モシ、あなたも聞いてお出でなされまするが、質屋がうたぐるも無理ではござりませぬぞへ。その病気には、なくてはならぬといふソウキセイとやら、箒星とやらいふ薬を、おまへが盗んだであらうといふ証拠は、ソレ、現在引つかけてゐさしやるその布子、掻巻の出どころ、くはしく言はつしやりませ。わしらも世間へ、どうか盗人を飼つておくやうに思はれては立ちませぬわナ。サア、その品々は、どこから取つてござつた。それとも、誰ぞ持って来ましたか、それを有体に言はつしやりませ。いけふてぐしい　（322―1）

⑱

づぶ六→民谷伊右衛門

モシ〳〵、あなた、お知る人かは存じませぬが、わしらの渡世の邪魔をするこの親父を、なんで止めだてなさるのだへ　（39―1）

⑲

お岩→お袖

アヽこれ。

なるほど、朝夕貧しい暮しをするゆゑ、そのやうに思やるも尤も。また、わしがこのやうな物かゝへてゐるゆゑ、なほさらさう見ゆる筈ぢやが、さつきに内を出る時に、すこしばらついたゆゑ、傘はなし、それでこれを。

マア〳〵、わしよりはそなたの身の上。お屋敷にゐる時分、与茂七といふ許嫁がありながら、この頃聞けば、おそろしい、地獄とやらに……なんぼ貧しい暮らしをしても、武士の娘のあらう事か。

トサ、表向きでは言はねばならぬ。そこを言われぬわしが身も、ありやうはそなたの推量のとほり、いやしいわざ

を勤めるも、年寄ったとゝさんが貧苦の上にわしらへ気がね。現在娘の兄弟に、隠して。　（106―7）

これらの用例に表れた対応語を図表に整理すると対応表D図になる。

この対応表D図に表れているように、男性の使用する「わしら」では、自称の動作・存在に関する表現に「勤めてゐる」「思うのさ」という平常動詞のほか、「存じませぬ」という謙譲語に丁寧の助動詞「ます」に否定の「ぬ」の付いた形や「止めだてなさるのだへ」の「～なさる」が対応語として見られる。

次に女性の使用例の対応語を見てみると、丁寧の助動詞「ます」に終助詞の「わ」と「ナ」の付いた「立ちませぬわナ」という敬意の軽い敬語表現も見られるが、ほとんどは「探られる」「か、へてゐる」「飼っツておく」等の平常動詞や、否定の助動詞「ぬ」を伴った「言はれぬ」「言はねばならぬ」等が対応している。

次に、前項と同様に話し手と聞き手の関係を図表Eに整理した。

このように男性の場合は、目上かやや目上、又は対等な相手に使用されている。

しかし、女性の場合、ほぼ対等か目下に対し使用されているため、男性語と女性語では差が見られる。

さらに、待遇段階を明確にするために前項同様「わしら」に対応する対称代名詞を調査する。先に挙げた使用例中では例⑰

対応表D　「わしら」

		自称		対称		
	話手→聞手	代名詞	動詞	代名詞	動詞	命令表現
男	づぶ六→民谷伊右衛門	わしら	存じませぬ	あなた	止めだてなさるのだへ	
男	仏孫兵衛→お袖	わしら				聞いて下され
男	甚太→浄念	わしら	勤めてゐる 思うのさ			
女	お岩→お袖	わし わしら	かかへてゐる 聞けば 言はねばならぬ 言われぬ 勤める	そなた	する 思やる 見ゆる ありながら しても	
女	お熊→庄七	わしら	探られる		言ってゐられて	言ってしまはしゃい
女	お熊→小塩田又之丞	わしら	飼っておく 立ちませぬわナ	あなた おまへ	おどしかけては 盗んだであらう 引っかけかけてゐさっしやる 言はっしゃりませ 取ってござった	

図表E　「わしら」

代名詞	頁	行	性	話し手	聞き手	性	待遇	備考
わしら	39	1	男	づぶ六	民谷伊右衛門	男	↑	
わしら	241	6	男	仏孫兵衛	お袖	女	―↑	
わしら	372	7	男	甚太	浄念	男	―	
わしら	106	7	女	お岩	お袖	女	―↓	
わしら	320	6	女	お熊	庄七	男	―	
わしら	322	1	女	お熊	小塩田又之丞	男	↑	
わしら（特）	378	8	女	お熊（口真似）	民谷伊右衛門	男	↓	口真似

例⑱に「あなた」、例⑰に「おまへ」、例⑲に「そなた」との対応が見られる。しかし、これらだけで判断するには資料的に不足なため、先述の⑭～⑲の使用例に於ける話し手と対称の関係で行われた会話中に表れるすべての対称代名詞を調査する。

⑭　仏孫兵衛→お袖
　　こなさん
⑮　甚太→浄念
　　なし
⑯　お熊→庄七（長蔵も含め）
　　こなさんたち・こなたしゅう
⑰　お熊→小塩田又之丞
　　あなた・おまへ・こなた
⑱　づぶ六→民谷伊右衛門
　　あなた・こなさん
⑲　お岩→お袖
　　そなた

男性の使用については「あなた」と「こなさん」が見られる。しかし「づぶ六」の使用の「こなさん」の場合は、「アイ、この二三丁先でござるが、こなさんはこの頃こゝへ越してござつた様子でござるの」（240―11）という例で、この例は初対面の相手との会話であるため丁寧な言葉を使用しているのである。それは、丁寧語である「ござる」が使用されているところからもうかがえる。

また、「あなた」は目上にかなり高い敬語表現を対応させて使用する語である。しかし、この使用例の話手である「づぶ六」は、普段使用している自称代名詞は「おれ」「おらア」であり、その点から考えると、「わし」は「づぶ六」の使用する自称代名詞の中では敬意が一番高いと思われるのが、「あなた」と直接的に対応する語とは考えにくい。

資料的に不足であるため断定することはできないが、「わしら」が軽い敬意を表す敬語表現と対応することや、対応表B図にあるように、例⑭「仏孫兵衛→お袖」の関係で「わし」が用いられていることからも、「わしら」と「わし」の使用法に差異は認められず、同じ待遇段階であると推測できる。

また、女性についても「わし」との使用法に差異は見られず、また対応する対称代名詞も「そなた」「こなた」「おまへ」であることから、同様の結果が得られたため、「わし」と同位の待遇段階であると考えられる。

（五）「わしゃ（ア）」

自称代名詞「わしゃ（ア）」は「わし＋は」の縮まった言い方であるため、「わし」とは同一の待遇意識に基づく表現と考えられるが、「わしゃ」の使用例は三例で、そのうち男性が一例である。女性は二例であるが、その内一例は特別用法である。用例が少なく資料不足ではあるが、「わし」と比較しながら出

来る限りの考察を加えることとする。

まず、使用例を挙げる。

⑳ 仏孫兵衛→お花

なるほど、あのばゝも年寄るほど根性が悪うなるて。わしも、年寄って退き去りするも、外聞が悪さに捨ておけば、よい事にしてつけ上がりをる。コレお花や、わが身もさぞくうとましからうが、マゝ辛抱してくりやれ。また仕様もあるぢやあろ……今すや〳〵寝てござつたが、どうもはかどらぬ御病気、あなたへ対しても、あのばゞが邪慳ゆゑ、わしや気の毒で。ほんに薬あげてもよい時分であらうぞや（297―7）

㉑ お熊→お花

ホゝゝゝ、そりやよう気がついたが、わしや玉子食うても、ぢゞい殿はあのやうなり、当てがござらぬ、いけ馬鹿〳〵しい（294―6）

㉒ 直助→佐藤与茂七

そんならとうたう按摩にするのか。わしやア足力療治で無性やたらにふんでふみこくる。それ承知なら療治さつしやるがよい（279―7）

㉓ お弓→お槇

イヤ〳〵、案じてたもんな。今日は別してこゝろよいはうぢやわいの。たゞ心にかゝるのは、行方の知れぬ民谷伊右衛門。何の遺恨に親人様、娘までも殺害なし、恩を仇なる人非人。わしや腹が立つわいの〳〵……いやもう以前を忘れぬそなたの志、召仕ひとは思はぬわいの。

この守りは娘お梅が肌身はなさぬ守袋。死なうはしにか忘れてゆきやつて思はぬ横死。思ひ廻せば思ひ廻すほど、あの民谷めにこのやうに（206―11）

これらの用例に表れた対応語を図表に整理すると対応表F図になる。

この対応表に表れているように「わしや（ア）」は、男性では自称の動作・存在に関する表現に「年寄って」「捨ておけば」「ふんでふみこくる」といった平常動詞が対応している。

女性の場合も「かゝる」「思い廻す」

対応表F 「わしや（ア）」

		自称		対称		
	話手→聞手	代名詞	動詞	代名詞	動詞	命令表現
男	仏孫兵衛→お花（特）	わし わしや	年寄って 捨ておけば	わがみ		辛抱してくりやれ
女	お弓→お槇	わしや	かかる 腹が立つわいの 思はぬわいの 思はぬ 思い廻す	そなた	案じて 忘れぬ	
	お熊→お花	わしや	食うても		気がついた	
男	直助→佐藤与茂七	わしやア	ふんでふみこくる		さしゃっしゃるがよい	

図表G「わしや（ア）」

代名詞	頁	行	性	話し手	聞き手	性	待遇	備考
わしら	297	7	男	仏孫兵衛	お花	女	↓	
わしら	206	11	女	お弓	お槇	女	↓	
わしら	294	6	女	お熊	お花	女	↓	
わしら	279	7	男	直助	佐藤与茂七	男	―	
わしら（特）	275	12	男	佐藤与茂七（町人）	直助	男	―	町人の真似

「食うても」等の平常動詞や、終助詞「わい」十間投助詞「の」の付いた「腹が立つわいの」「思はぬわいの」、否定の表現でも平常動詞「思う」に助動詞「ぬ」の付いた「思はぬ」といった対応語が見られる。

次に、話し手と聞き手の関係を図表G図に整理した。

このG図から、男性の場合、目下もしくは対等な相手に使用されている。ただし、目下の待遇となっている「仏孫兵衛→お花」については、「わしや」が使用された際の例は、話中内の登場人物である目上の「小塩田又之丞」との間で行われた会話の中のものである。聞き手の目下である「お花」に対して直接的に使用している表現ではないため特別用法とした。また、他の女性の使用の場合は、目下に対し使用されている。

これらの結果を「わし」と比較すると、男性の使用の場合は、「わし」は敬語表現か平常動詞の対応であるが、「わしや（ア）」も平常動詞の対応である。また、聞き手との身分関係については、前述のように直接会話をしている目下の「お花」に対する表現ではなく、話題となっている目上の「小塩田又之丞」に対しての表現であることから、対等以上の相手に使用すると考えられる。よって「わし」と身分関係に於いても同じ使用であると考えられる。また、女性の使用についても「わし」と「わしや（ア）」は同じ待遇であると考えられる。

更にこれまでと同様に、待遇段階を明確にするために対応する対称代名詞を調査する。

⑳ 仏孫兵衛→お花
　そち・そなた・わがみ

㉑ お熊→お花
　そなた

㉒ 直助→佐藤与茂七
　おまへ・こなさん・こなた

㉓ お弓→お槇
　そなた・わがみ

このように男性の使用については「おまへ」や「こなた」等が多く使用される「わし」と、例㉒「直助→佐藤与茂七」では同じ特徴であることがうかがえる。また、女性の使用の場合は「そなた」との対応が考えられるが、これも「わし」と同じ結果である。

よって、「わしや（ア）」の語群の特徴は、男性語も女性語もそれぞれの「わし」と同様の特徴であると考えられ、ほぼ同種の待遇意識に基づく表現であると考えられる。特に、男性の使

用では、「わし」と「わしや」が共用されている例があることからも明確である。

本稿では「わし」を中心に、その複数形の「わしら」音転した「わしや（ア）」について考察を加えたが、更に他の自称代名詞や資料的に不足しているものについては、今後の研究に託すこととする。

参考資料

注1　人称代名詞「あなた」「おまへ」の研究　平成三十年　武蔵野大学日本文学研究所紀要　第六号

注2　人称代名詞「こなた」「おのれ」「てまへ」「そなた」の研究　令和二年　武蔵野大学日本文学研究所紀要　第八号

・郡司正勝『新潮日本古典集成　東海道四谷怪談』　昭和56年　新潮社

・河竹繁俊　江戸文学叢書　第5巻『歌舞伎名作集　上』講談社

・山崎久之『国語待遇表現体系の研究　近世編』　昭和38年　武蔵野書院

・山崎久之『続　国語待遇表現体系の研究　』　平成2年　武蔵野書院

・山崎久之『増補補訂正版　国語待遇表現体系の研究　』　平成16年　武蔵野書院

・小島俊夫『後期江戸ことばの敬語体系』昭和49年　笠間書院

・辻村俊樹「待遇語法」『敬語の史的研究』昭和43年　東京堂

・大石初太郎「待遇表現の体系」『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』昭和51年　表現社

・鵜飼伴子『四代目鶴屋南北論　―悪人劇の系譜と趣向を中心に―』平成17年　風間書房

・井草俊夫『鶴屋南北の研究』　平成3年　桜楓社

・塩見鮮一郎『四谷怪談地誌』平成20年　河出書房新社